

身体と教育のあり方を玉川学園の舞踊教育からさぐる

潮木玲奈（大妻女子大学）

教育と身体・舞踊教育・身体表現

背景・目的

教育界では長い間、教える教えられるの関係の中で、教わる存在の身体は受け身であり受動的な存在として位置付けられていた。しかし、近年教育界における身体の捉え方が能動的な存在として変化してきている。

乳幼児教育においては、乳幼児期の発達特徴として、身体を基盤として学んでいく存在であることが明らかにされており、言葉の発達や人間関係の発達において身体を用いたコミュニケーションや知識の深まりを援助することが、乳幼児期における教育の基礎となっている。また、幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定こども園要領において幼児の主体的な活動を捉し、幼児期にふさわしい生活が展開されることが基本である。

小学校以降の教育課程においても表現する力を養うことが教育の目的の中に組み込まれ、教育場面において子ども理解は、子どもが能動的に身体を通して表現する存在であることを理解することが求められている。

大学教育においても身体を用いた共同的な学びの有効性が研究され、アクティブ・ラーニングの導入が推奨されている。教育界の中で受動的な存在の身体は、能動的な場所へと位置を変えてきている。そこで本研究では、身体を用いた共同的な学びにおける教育の有効性を90年前から見出し、玉川学園の教育の中に取り入れていた小原国芳氏の舞踊教育への思いや、玉川学園においてカリキュラムの中に導入されている舞踊教育の歴史を追うことで、教育界における身体と教育が向かうべき方向性をさぐることを目的とする。

研究方法

日時：2015年6月23日（月）15:00～17:00

場所：小原記念館の応接室

方法：座談方式での会話を分析

座談会の構成メンバー：舞踊教育に携わる教員でおられる、岡田純子氏・玉川まや子氏・小野真理子氏・小川洋子氏・玉川さやか氏・全人教育の研究者である石橋哲成氏・玉川学園教育博物館学園資料担当者である白柳弘幸氏・筆者

座談会では、舞踊教育を実際に指導されてきた先生方、全人教育を実践されてきた先生方の対話から、玉川学園における舞踊教育のねらいと目的が明確に見えてきた。そこで本論では、玉川学園の教育内容に舞踊教育が導入された経緯、玉川学園内での舞踊教育の発展過程を座談会の対話から分析することを試みた。

1 舞踊教育の導入

1-1 全人教育における芸術教育

玉川学園の創立者である小原國芳氏(1887-1977)は、八大教育主張講演において「全人教育」の教育理念を提唱した人物である。小原氏は「全人教育は人間の形成には真・善・美・聖・健・富の6つの価値を調和的に創造することを教育の理想としている。」具体的な理想像として、「哲学(学問)・道徳・芸術・宗教・身体・経済の六領域がそれぞれのその独自の価値の実現を目指すことによって、豊かに調和的に完全境に近づくことができる。」と主張した。

全人教育の理念を掲げて創立された玉川学園では、芸術教育を教育の柱の一つとし教育実践が進められている。小原氏によると「私の主張は頗る明瞭である。人間完成の為に、全人格完成の為に、真の人間をつくる為に芸術教育を高調するのである。」と述べられている。一方で小原氏は芸術教育だけに偏るような教育を進めていたのではない。小原氏は「芸術教育さえやれば人間教育ができるなぞと極端なことは決して言わない。正しきまでに、真実までに帰り来る為に芸術教育を高調する。」と述べ、知的情操・道徳的情操・宗教的

情操などの人間の情的側面の育ちに必要であると主張していた。

玉川学園では、小原氏の理想とする芸術教育の実践として、舞踊教育と学校劇が創立当初よりカリキュラムに多く取り入れられている。舞踊教育を任されていたのは、小原氏の娘である岡田純子氏であり、学校劇を任されていたのは純子氏の夫である岡田陽氏であった。

1-2 岡田純子氏

石橋	純子先生方羨ましいですね、三代続いていて
純子	踊りにリトミックや音楽、演劇ひとつだけじゃないいろいろな環境に触れられたことに感謝です。 「自分で考えなさい」ってことはすごく父(国芳氏)に言われたし、数学の勉強している時に答えは絶対に教えてくれないのね。 子どもの時、きゃときゅがわからなかったら、「100回言ってごらん」って言われてヒントをくれて、「あとは自分で考えてごらん」って言われてね
さや か	おばあちゃん、凄く自由だったって言ってたよね
純子	壁に絵を描いても良いって言われて、ちゃんとした絵ならって言われて、2階から下まで精一杯落書きしたわ

岡田純子氏は小原國芳氏の娘であり、玉川学園における舞踊教育を作り上げた人物である。純子氏は国芳氏の娘として、玉川学園の敷地内に住み、父である国芳氏と母信氏によって伸びやかに育てられたことが対話から伺える。また、国芳氏が玉川学園の敷地内に住んでいたことで、玉川学園の子どもたちと共に生活を送り、その教育の中に純子氏が自然に入っていたことも伺える。

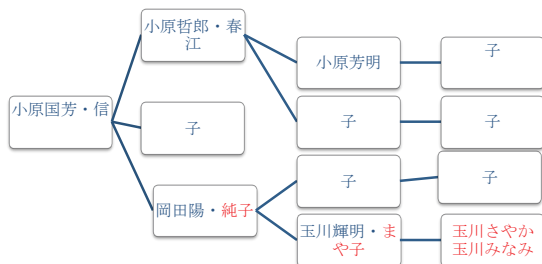


図1-1 小原国芳氏親族に受け継がれる舞踊教育

純子氏は自身が作り上げてきた舞踊教育を娘さんやお孫さんの代へと引き継いでいかれ、娘である玉川まや子氏は玉川学園小学部と玉川大学芸術学部で舞踊教育を長年にわたり指導されていた。そして、孫である玉川さやか氏、みなみ氏は現在、幼稚部・小学部の舞踊教育を担当されている。筆者は、3代続いて玉川の舞踊教育が受け継がれていることが玉川学園における舞踊教育の魅力となっているのではないかと考える。

1-3 小林宗作氏によるリトミック

石橋	私の知っている限り、成城学園の幼稚部ができて、小林宗作先生が幼稚園の主事をされていたんですよ。小原先生が自宅の庭を開放して小林宗作先生をお呼びして
純子	ダルクローズのもとでね
石橋	ダルクローズのもとでリトミックを習って帰ってこられて、哲郎先生(小原氏の息子さん)は園児として正式に(成城学園幼稚部へ)入られたけども、純子先生は自宅が幼稚園だったから、生まれながらにそこ(小原氏家の庭で行われている幼児教育)に入られたと聞いています。
純子	小林先生は、たまにしか学園にはいらっしやらなかったけど、小林先生のお弟子さんたちがダルクローズに習って帰ってこられてから、玉川学園の幼稚園の先生とか音楽の先生(山内先生)が習って、私たちが幼稚園になった頃教えてくださったんです。

成城学園(小原氏が高等学校の校長を8年勤められたのち、総合学園として成城学園を作られる)の主事であった小林宗作氏は、1925年に半年間ジュネーブに渡り、リトミックの創始者であるエミール・ジャック・ダルクローズ(1865-1950)のもとでrythmique(リトミック)の指導法を学んだ。小林宗作氏は日本に帰り幼児教育へ初めてリトミックを導入した人物である。

玉川学園では1933年に小林宗作氏の弟子である山内千代子氏が玉川学園のリトミックと音楽の専任教師として迎えられた。山内千代子氏は、リトミックの目的を「全心身の発達を促し、リズムに敏感な、リズムカルな表現能力豊かな身体をつくる」と述べられていた。ねらいは「我々が呼吸し生活している宇宙のリズムに目覚め、鋭感に是を感銘して肉体を通して表現することに依り、人間の感覚を調整し、肉体と精神の最

も均衡ある調和の取れた発達を促進する」と玉川学園の月刊誌である「全人」の中で語っている。つまり、子どもたちにおける心身の調和のとれた発達のために、リトミックが幼稚部と小学部の教育実践に取り入れられたことがわかる。

1-4 小林宗作氏 (1893-1963)

石橋	小林宗作先生は成城の園長が主でね
純子	時々、玉川に教えに来てくださったの、私が小学生の時何度かいらして、直接教わったこともあるし、小林先生のお弟子さんで音楽の先生が、小学校 1 年生から 6 年生まで、音楽とリトミックと一緒に教えてくださっていた。その音楽も教科書だけではなくて、色々な国の民謡も教えてくださった。

石橋	<p>國芳先生はなんとしてでも幼稚園を作りたいかったのね。小原先生の理想の幼稚園があったが、周りの人に「そんな理想の幼稚園は無理ですよ」と言われながらも、ある時に「ぴったりの人が見つかりました。今、ダルクローズのもとでリトミックを学んでいる、小林宗作です。」という情報を得て、小原先生が使いを出して、成城学園の園長をしてくださるように口説いたんだよね。</p> <p>その時、幼稚園の教員免許を持っている人でなく、幼児教育はこうあるべきだと型にはまった人じゃなく、「子どものことが好きで、本当にこれから幼児教育を真剣にやっっていこうとする人がいいんだ」といって、幼稚園の先生を探して、林かずさん（日本女子大学出身だが免許を持っていなかった）が声をかけられた。</p>
----	---

石橋	この人だとお願いした小林かずさんは、國芳先生の奥様の弟さんと結婚して、高井かずさんになられた。その娘さんの高井佳子さんが幼稚部で長いこと教えられていたのね。
----	--

純子	その、佳子先生はトモエ学園に 2・3 年間行って、小林宗作先生の元で勉強なされた。
----	---

小林宗作氏は小原氏の元、成城学園で幼稚部の園長を務めるが、成城事件をきっかけに、石井獏氏の勧めで自由が丘にトモエ学園を設立。リトミックを教育の基盤とした小中一貫の学校を行っていた。東京大空襲

で校舎が焼失した後は、残され幼稚園と国立音楽大学で初等教育養成と付属学校の整備に力を注がれた。

小原氏は「今までとは違う子どもらしく、楽しい教育をしたい」と語り、大正までの教育に疑問を感じ、子どもが輝く教育を探したところ、小林宗作氏が実践しているリトミックを基盤にした教育に魅力を感じ、幼児教育に必要であると考え、玉川学園幼稚部で働く先生を、小林宗作のトモエ学園に指導方法を学ばせに送っていた。

玉川学園の中では幼稚部の教育だけにとどまらず、小学部でも小林宗作氏の弟子である、山内千代子氏を音楽の専任教師に迎えていたことは、リトミック教育が子どもたちの育ちにとって重要であるという小原氏のお考えがここで明確になっている。

小原氏は、「リトミックはイギリスなどでは、幼稚園から小・中学校まで一般に普及されています。日本でも昨今、漸く体操の一部に加えられていますが、是非とも、幼稚園・小学校だけには加えて欲しいものです。」と学校舞踊の中で書かれており、リトミック教育の幼稚園・小学校への導入を願っていたことが、ここでも示されている。

舞踊教育の内容としてリトミックが適している点を、小原氏は「実に、舞踊の科学的訓練となり、従来、姿勢と拍子に対する観念を基礎とした舞踊教育法に、一躍、リズムを把握せしめようとするのであるから、ダルクローズのリトミックが与えた舞踊のリズムに対する再確認は実に貴重である。」と述べ、ダルクローズによるリトミックの教育的効果を賞賛していた。

小林宗作氏より初めて日本に導入された、ダルクローズによるリトミックは、リズム表現による音楽教育の方法を言う、スイスの音楽教育家エミール・ダルクローズが 1905 年ごろ創案した音楽教育体系で、身体でリズムを学ぶことによった、精神と肉体の一致調和、自発性と反射性、精神の集中力と記憶力、創造力などを養う人間教育の手段として広く活用された教授法である。

1-5 石井獏による現代舞踊

純子	小学校 3 年か 4 年の時に石井獏先生が玉川学園に来て、踊りを見せてくださって、踊りが好きで習いたいと（父 國芳氏に）お願いして、石井獏先生のスタジオがある自由が丘まで通っていたの。戦争中も頑張って通って、空襲になると電車が止まっちゃいますのでし
----	--

	よ。どこかの駅でずっと動き出すまで待っていたの。
石橋	純子先生は石井獺さんに習うきっかけは、国芳先生のおすすめですか？
純子	しょっちゅう獺さんが来て、踊りを見せてくださって、自分で行きたいなあと。そして、父が行って良いということで、同級生と2人で小学校が終わって一緒に通ってたんですね。
石橋	やっぱり、そこには獺さんがしょっちゅういらしていた環境が大きいですか？
純子	それと、父が良く言うには、父の母が早く亡くなったんだけど、村中で一番盆踊りが上手だった、お前はそれを受け継いでいるって良く言っていて、幼稚園の先生はとてもリトミックが上手で、三角点の下に（玉川学園内）にお家があったんですよ。小さなお部屋ですけど住み込みで、そこでも良く習って、小学校では山内先生が良く教えてくださったの、そんな環境だから、石井獺さんの踊りにも興味を持って
まや	小林宗作先生、そのお弟子さん、石井獺先生が教えてくださったのが、玉川の舞踊のはじまりになっていて、母が大人になってからは母が指導するようになったのね。

石井獺氏（1886-1962）は日本の現代舞踊の父と言われる。明治44年に帝国劇場歌劇部一期生隣、G・V・ローシーについて古典バレエを学んだ人物である。宝塚少女歌劇の洋舞教師を経て、浅草オペラの旗揚げ公演を行った。大正11年から4年間義妹石井小浪と欧米各地を公演。帰国後東京自由が丘に舞踊研究所を設立し、舞踊誌の創作や後進の育成に尽くした。昭和28年に芸術選奨文部大臣賞を受賞。昭和30年に紫綬褒章の第1号受賞者となった。

小原氏は純子氏について、著書である学校舞踊の中で語っている。「純子は2つの年からリトミックを習うことができました。自然に踊り好きに、音楽好きになりました。10の年から石井先生につくことができました。玉川で舞踊とリトミックを教えさせていただくことになってから民俗舞踊家の黛節子先生につくことができました。（中略）玉川の全人教育の本当一端を担当させていただいています。親ばかの私の嬉しさの一つです」

小原氏は踊りの上手な母を見ながら育ち、自らも盆踊りが大好きであったという。踊ることの楽しさ、踊りを見ることの楽しさを知っていた小原氏は、日本が産んだ天才舞踊家である石井獺を玉川学園に招待しては、子どもたちと共に踊りを見ることを楽しんだという。また、石井獺の直弟子である石井カナナ氏・和田内恭子氏・石垣初江氏を小学部の講師として招き、小学部の舞踊の授業を行った。現在では玉川学園小学部のカリキュラムの中で、低学年の体育授業としてムーブメントという科目名で舞踊教育が続けられている。指導者は小原氏の孫であるまや子氏の同級生、小野真理子氏であり、座談会の構成員の一人である。

現在、玉川学園中学部においては、体育のカリキュラムの中ではなく、自由研究という授業の中にクリエイティブ・ムーブメントがあり、通年で週1回、選択した生徒が授業を受けることができる。指導者は純子氏・まや子氏から舞踊教育を学んだ、小川洋子氏であり、座談会の構成員の一人である。

小原氏は玉川教育（30年史）の中で、「私たちの全人教育の一環としての舞踊教育によって、何とか、試験と点数とカンニングと出世と打算と駆け引きとアクセクしとる哀れな日本青少年たちが少しでも救えたらと念願して精進しておるところです」と語り、玉川学園の教育にて舞踊教育が解放された心身を作り上げるための、人間教育として位置付けられていることがはっきりと書かれている。

2 舞踊教育の発展

2-1 舞踊発表会

まや子	「玉川の演劇と舞踊」の本が出た時に、ほぼ一年間、父（岡田陽氏）と母（純子氏）はヨーロッパに二人で勉強に行ったのね。その時にヨーロッパで世界演劇大会があつて、それに出るためにこの本（玉川の演劇と舞踊）を作ったの、「日本でこういうことやってますよ」と報告したわけです。
純子	この頃は、日本の中で表現教育といったら、演劇にしる舞踊にしる玉川が本当に一番で、みんなで頑張っていた時でした。しかし、ヨーロッパに行ってみると子ども達の表現はシナリオの表現からは一歩進んでいて、クリエイティブ・ムーブメント、クリエイティブ・ドラマというのが主流になっていて、いっぱい勉強して帰ってきた。

岡田はよくワークショップをやって、ヨーロッパで勉強してきたものを日本の文化に合うように工夫しながら、日本中の学校の先生に伝えようとしていました。

純子 私の子どもの頃は夏の地方公演、ずっと夜行に乗って、地方の学校を廻ってね。机を並べたステージでみんなで踊って、玉川学園の体操と音楽というので、斎藤由里男先生と岡本敏明先生が小原先生ご夫婦と一緒に全国公演したの、なんだか私だけについて廻っていたのね。
最初はデンマーク体操と音楽でやっていて、そのうちに演劇と舞踊が加わったの。戦後、教育研究会は年に4回ぐらいありましたでしょ。礼拝堂がいっぱいで溢れかえった時に、必ず父が「学校劇と舞踊をやれ」と言っていて、その他でもお客さんが来たら「舞踊をやれ」と言っていて、日曜日ごとにお客さんが来るから休みがなくて大変でしたのね。

昭和20年から小学部において舞踊の授業を担当した岡田純子氏は、昭和29年より舞踊勉強会として発表会を始めた。舞踊勉強会としてはじまった発表会は毎年開かれ、昭和34年第6回目で踊発表会と名前を変え、毎年開催されていた。舞踊を観るのが大好きだった小原氏は、毎年、真ん中に座り発表会を見ては、「もう一回やって」などと声をかけられるほど楽しんでおられた。発表会が行われるようになってからは、小原氏の教育研究会全国公演でも舞踊が加わり、全国の学校で舞踊の公演が行われた。

岡田陽氏と岡田純子氏は昭和30年に、ヨーロッパで行われる世界児童演劇大会に出るため、玉川学園の子どもたちの実践を写真と解説付きで一冊の本にまとめた。この時の本が「玉川の演劇と舞踊」である。

演劇大会出場のためヨーロッパへ渡った岡田陽氏と岡田純子氏は、約1年間、ヨーロッパでクリエイティブ・ムーブメントやクリエイティブ・ドラマのワークショップを受講された。また、子どもたちの実践場面を見学し、表現教育について新しい多くの指導方法を学んで帰国された。帰国後の岡田純子氏の舞踊の教育内容は、今までの指導方法より一層、子どもたちの主体的な活動から展開されるように変わったそうである。

昭和30年の時点で世界の教育では、より、クリエイティブな身体表現や演劇教育が学童期から成人期の教

育で実践されていたことが読み取れる。そして、この舞踊教育は昭和30年以降玉川学園の中で実践され続けている。能動的な存在として身体を捉えた先進的な教育実践が60年にも渡り続けられていることの証明となっている。

2-2 芸術学科開講

昭和39年4月に玉川大学文学部芸術学科が発足されるが、発足にあたり岡田純子氏はイギリスのクリエイティブ・ムーブメント、欧州各地で舞踊を学んで、芸術学部の専攻生に指導された。

イギリスのクリエイティブ・ムーブメントはイギリスの舞踊家であるルドルフ・ラバン(1879-1958)によって提唱され実践された身体表現教育である。

石橋 1964年に岡田純子(旧姓小原)は玉川大学文学部芸術学科の設立に備え、ジュネーブのリトミック本校にて研修して、イギリスのクリエイティブ・ムーブメント及び、欧州各地の舞踊を学んで、後の玉川学園の舞踊教育の一層の充実を果たすべく貢献したのね。

1964年4月に玉川大学文学部芸術学科が発足され、純子氏はこの演劇専攻の研究員11人の一人となり、学園における舞踊教育の柱であったリトミックを、専攻生に習得させ、さらに、リトミックを通して身体表現の力を高めるために尽力されたんですね。

純子 小学校でそれまで教えていたんですけども、ムーブメントはイギリスですごく盛んで、大学でムーブメントを教えているところを見学させて頂いたりして、小学校に行くとBDCラジオで流れてくる解説に乗って、子どもたちが踊るのを見て、素晴らしいと思って帰ってきて、小学部での教え方もだいぶ変わって、岡田も小学部の先生に「純子の教え方だいぶ変わったでしょ」っていつてね。
石井獺さんに習ったこと、リトミック、自分の考えも入っていたけど、世界やイギリスの最前線に惹かれていった

2-3 ルドルフ・ラバンによるクリエイティブ・ムーブメント

ルドルフ・ラバン(1879-1958)は人間の身体の動きを「動きは価値があると思われる対象を追求するため

におこされるものである」と考え、動くこと自体になんらかの意図があるという考えを主張した。また、身体の動きから、他者の心境を看取れるものであるとし「動きの対象に向けられる心境が外に現れて、隠れているいろいろなものが看取れる」と考えていた。身体の動きから心情が読み取れると考えたラバンは、人間の動きを観察することにより、「人間を深く理解し、人間の感情をよく感じとっていた。」そのため、彼の身体の動きの分析は動きのリズムと形態とは特定の状況の下に行動する人間の態度を示すものであると分析している。そして人間の動きを「身体・時間・空間・筋エネルギーの区分の様々な組み合わせの一つを使ったものとして理解」し、4つの組み合わせの多くが、論理的な方法で記録されることができる行為に照応し、4つの区分で動きを記述していく方法を作り上げた。

人間の子どもや動物は、遊びながらにして、生活に必要なエフォート能力を自然に身につけていくということを観察する中で発見し、「心身は最も良いエフォートの組み合わせを、わざわざ考えなくても自然に選んだり、あてはめることができるようになるまで改良を続け、状況の激変にもすぐさまに対応できるように鍛えられていく。」と主張した。

自然の中で発生する踊ることへの衝動は「人間活動の全領域で動きの伝統の驚くべき多種多様さと発展していく。」と述べ舞踊をすることで、人間の精神生活がより高まると考えていた。舞踊は楽しく、音楽のリズムを動きとともに共有することで、闘い、狩り、愛の行為、その他もろもろの営みの補助役を務め、精神との結びつきが強い運動であり「舞踊し、運動で思考する中で、人間は高い精神生活をあこがれ、そこに秩序があることを知るようになってきた。」と分析した。

エフォートを自発的に楽しみながら習得できる好機会は、調和的で健全な発達にとって本質的な意味合いをもつと主張し、調和的で健全な発達の側面には、身体表現をグループ活動で行うことで、「他者との交流と関係づけの困難さに苦しんでいる人の助けになるようだ。」と述べており、人との関わり方を学ぶ要素があることも見い出していた。

ラバンによる身体の動きを観察し、人間の成長過程を分析した研究は、教育における身体をとおした共同的な学びの必要性についての裏付となる研究である。玉川学園における舞踊教育がラバンの教育方法を取り入れ、人間の調和的で健全な発達のためにカリキュラムの中に組み込まれていることが明確である。

2-4 マリオン・ゴーフの来日

昭和50年、小原氏の招待により、カリフォルニア州ロサンゼルスダンスセンターよりアン・リーフ・バーソン女史が来日し、ムーブメント指導者講集が開かれた。その後平成になってから、ラバンのお弟子さんであるマリオン・ゴーフ氏が来日した。ゴーフ氏はイギリスのラバンセンターで指導を行う舞踊指導家である。玉川学園では8週間に渡り、ダンスの指導を生徒・学生が受講することができた。

ゴーフ氏の来日後、ゴーフ氏の著書である「ダンスの教え方・学び方」が玉川まや子氏により翻訳され、この本の中でゴーフ氏はダンスをすること自体が「身体の内側からの喜びをもたらしてくれる。」と述べている。内側からの感情を表現することが喜びへとつながることを強調していた。そして、学校教育におけるダンス教育の重要性に触れており、他教科との大きな違いに非言語伝達手段を用いることでの教育的意義が述べられている。ダンスには「美的教育・文化教育の手段であり、自己表現の場であり、伝統的・社会的・演劇的表現様式に接する機会を与えてくれる。幅広い、バランスのとれたカリキュラムをつくるためには、人間の経験そのものと言ってもよい、ダンスという重要な領域をおろそかにすることはできない」(英奥ダンス教育連合組織 文章1989)と教育連合組織の文章を引用して述べている。

教科としてのダンスの捉え方ではなく、バランスのとれたカリキュラムをつくるために、舞踊教育が重要であるという主張は、能動的な存在として身体を捉えているといえる。

2-5 玉川の集い

石橋	玉川の集いをやっていると、岡田先生と純子先生が一番忙しんだけど、それに伴って、音楽は音楽の先生が作るから大変で
純子	音楽専攻の人たちがオーケストラも演奏してくださいましたね。もう、本当に学校中でやったのよ。全部の先生がもうそういうものだと思っていたのかな。自然に学校中がそういうものだったから
潮木	生活の中に本当に自然にあったということですね
純子	学校生活の中に自然にね 青い鳥をやった時、トメ子さんがいじ悪な猫の役をやったら、小学生に「猫だ」っていじ

	められてね。小学生の中に青い鳥の物語がずっと続いてくれてね。
石橋	自然に学園中が繋がっているわけですね
まや子	父(岡田陽氏)がね「僕らは素人だから」ということを私たちはいい加減な逃げ口上に使うことを潔しとしない」むしろ、それを誇りとし、自戒として、素人らしく真面目に、一生懸命やろうと心掛けている」って本に書いてあるのね。 「劇化とか教室劇とか言って、白々しい、嘘くさいマネゴトを強要された時にする子ども達の照れ臭い迷惑そうな顔を、平然と見逃すようなことができる教師に、学校劇の指導などできるわけがない。そもそもこの複雑な現代社会の絆の中で、人間の劇的本能の自然な解放なんてことが、容易に行われるはずがない。劇化や教室劇が立派に環境構成されて、演劇的なひつの高まりとなって、子ども達の世界に昇華されるには、なみなみならぬ教師のセンスと努力が必要とされる」とも書いています。 見た目だけとか、揃って上手にやるとか、そういうことじゃなくて、子ども一人一人が輝いていけるように、本当にその子の中から自然に出てくるような、丁寧な指導がそこにあったんだろうね。 子どもの中において、子どもの輝くものを引き出すことができる人たちが子どもたちと付き合い合うからできる表現であって、教育の中にあるものだという事を一生見失わなかったということが大事なんだろうね。

「玉川の集い」は全学園を上げて総合教育として行われていたことは対話から明確である。芸術教育が全人教育の柱の一つである玉川学園では、先生方も、子どもたちも総動員で行事が進められていた。教科の枠を超え、学年・学部を超えて、みなが集って行われていた行事は、先生と子どもたちが生活の中から自然に出てくる表現を大切に、精一杯の力を出し切った集いを目指していたからこそ、関わる人全てが身体と知を巧みに使うことを学んでいき、調和のとれた全人格の完成を目指す実践であったことが伺える。

玉川の集いは、日々の教育そのものであったため、玉川学園 30 年史・50 年史にも特に表記はなく、どの

時期に開催されていたのか、どのような実践が行われていたのかが資料として残っていないことが残念である。今後、舞踊教育の研究を進める中で、実践されていた方々のお話が聞けることを望んでいる。

2-6 海外公演

石橋	メキシコに行ったのはまやちゃんが何歳の時?
まや子	8歳の時で小学校三年生
純子	あの時は許可が下りなくて、父がわざわざメキシコまで行って交渉して
石橋	あれが昭和36年です。 國芳先生がおっしゃっていたのは、岡田一家は全員行くことになったので。岡田先生のお母様がせめて一人は置いていったら、と心配なさったそうです。あの頃の海外は怖いからね

昭和36年 アメリカ・メキシコ公演

昭和43年 ヨーロッパ派遣舞踊団公演

昭和47年 ギリシャフェスティバル参加(玉川舞踊団公演)

昭和53年 玉川大学舞踊合唱団アメリカ・カナダ公演

昭和56年 玉川大学演劇舞踊団イギリス公演

海外公演は昭和36年のメキシコ公演を皮切りに、3年おきに開催されており各国を巡回している。公演の出演者は日々の生活の中で適した役が決められていったと語られていた。公演場所が海外へと開かれて行った時であっても、日々の生活からの表現が大切にされていたことが、純子氏の語りから伺えた。

玉川の表現教育がグローバルな教育であったことは純子氏の研究と研修の歴史から明らかであるが、そのグローバルな教育から生まれた公演だからこそ、公演の場も海外へと向かっていたのであろう。舞踊公演・玉川の集い・海外公演と昭和20年から36年間もの間続けられた岡田純子氏の功績は本当に素晴らしいものである。この歴史的価値のある教育内容について研究が進められることを強く望んでいる。

2-7 岡田陽氏

玉川学園における舞踊教育の導入は小林宗作氏によ

るダルクローズ・リトミック、石井猷氏による創作舞踊があった。その後、舞踊教育の発展は純子氏が研修と研究を積み重ね、リトミックと創作舞踊、クリエイティブ・ムーブメント（ヨーロッパ）やクリエイティブ・ドラマ（アメリカ）、ルドルフ・ラバンによるムーブメント（イギリス）、日本各地の民族舞踊や民族芸能など、様々な身体表現教育が織り交ぜられ、玉川独自の舞踊教育が作り上げられて行った。

純子氏がインタビューで語ったように、舞踊教育の指導理念には夫である岡田陽氏の考えが大きく影響している。ここでは、玉川学園中学部の部長を務めながら、学校劇の指導をなさっていた岡田陽氏の著書である「子どもの表現教育」で記されている内容の中から、岡田氏が表現教育について述べられている教育観を抜粋し、身体と教育についてどのように捉えられていたかを記していく。

岡田氏は人間教育について「知識伝達だけの教育に満足せず、人間が人間であることを愛おしみ、それを何よりも大切なこととして、次の世代に伝えたいと思う」と述べている。この一文から伺える、当時の教育へ向けた指摘は、現代の教育が知識偏重の傾向にあり、人間特有の力である、人と心を交わしながら人間が成長するプロセスを大切に扱っていないことに苦言されている。そして、現代の教育では、大人が子どもに教えたいことを教え込むことが多く、子どもの自発的な思考や表現に丁寧な寄り添い、学びを広げていく教育がなされていない現状への指摘を、表現教育の重要性を訴えている中に潜ませているのであろう。

また、岡田氏は「表現活動の経験は、子どもの将来の立身出世や金儲けなど、どのように関係するかわからない。しかし、個人の生き方として、うちに豊かなイメージを描き、その実現に向かって柔軟な思いをめぐらせ、そして果敢にあるいは慎重に工夫と努力を積み重ね、思考錯誤を恐れず、ついに具体的な成果に達するという体験のパターンを子ども時代から度々経験し、蓄積していくことは、人生の航路に勇気と自信を持って立ち向かう生活姿勢を作り上げるのに役立つ」と述べ、生きる力を培う教育として表現活動の経験より得る事ができる学びの重要性を訴えられた。

岡田氏はイギリスの演劇教育を代表するブライアン・ウェイの著書である「ドラマによる表現教育」を翻訳され、玉川の表現教育はウェイからの影響を多大に受けた。表現される場は自由に解放され、本来の自分が出される場であることが基本であること、主体性

が尊重され、感情は丁寧に扱われ、人それぞれの気づきが成長過程を支えていることを理解し指導することが現在の教育方法の中にも取り入れられている。

まとめと考察

玉川学園創立者である小原国芳氏が考える教育の柱として位置付けられた芸術教育は、全人格完成の為に必要であると考えられており、真の人間をつくる為に人間の情的側面の育ちを支える役割を担っていた。

教育方法はダルクローズのリトミック教育、現代舞踊、日本舞踊、民族舞踊、ラバンによる身体表現、クリエイティブ・ムーブメント、ブライアン・ウェイのドラマ教育の教育方法や理念を多く取り入れていた。

リトミックの発案者である、エミール・ジャック・ダルクローズは、全心身の発達を促し、リズムに敏感な、リズムカルな表現能力豊かな身体をつくることをリトミックの目的とし、我々が呼吸し生活している宇宙のリズムに目覚め、鋭感に是を感銘して肉体を通して表現することに依り、人間の感覚を調整し、肉体と精神の最も均衡ある調和の取れた発達を促進する教育であるとした。身体でリズムを学ぶことによって、精神と肉体の一致調和、自発性と反射性、精神の集中力と記憶力、創造力などを養う身体を人間教育の手段として広く活用したのである。

小原氏は全人教育の一環としての舞踊教育によって、何とか、試験と点数とカンニングと出世と打算と駆け引きとアクセクしとる哀れな日本青少年たちが少しでも救えたらと念願して精進しておるところです」と語り、玉川学園の教育において舞踊教育が人間教育として位置付けられていることがしっかりと書かれている。

ラバン理論を作り出した、ルドルフ・ラバンは、心身の動きは、他者の心境を看取れるものであるとし「動きの対象に向けられる心境が外に現れて、隠れているいろいろなものが看とれる」と考えた。身体の動きから心情が読み取れると考えたラバンは、人間の動きを観察することにより、人間を深く理解し、人間の感情をよく感じとっていた。ラバンの身体をとおした人間の成長過程の分析は、教育における身体をとおした共同的な学びの必要性についての裏付となる研究である。玉川学園における舞踊教育はラバンの教育方法が取り入れられ、人間の調和的で健全な発達のためにカリキュラムの中で組み込まれていることが明確にわかる。

ラバンの弟子であるマリオン・ゴーフは内側からの

感情を表現することが喜びへとつながることを強調していた。そして、学校教育におけるダンス教育の重要性に触れており、他教科との大きな違いに非言語伝達手段を用いることでの教育的意義が述べられ、幅広い、バランスのとれたカリキュラムをつくるためには、人間の経験そのものと言ってもよい、ダンスという重要な領域をおろそかにすることはできないと玉川学園に伝えて下さった。

岡田陽氏は知識伝達だけの教育に満足せず、人間が人間であることを愛おしみ、それを何よりも大切なこととし、うちに豊かなイメージを描き、その実現に向かって柔軟な思いをめぐらせ、そして果敢にあるいは慎重に工夫と努力を積み重ね、思考錯誤を恐れず、ついに具体的な成果に達するという体験のパターンを子ども時代から度々経験し、蓄積していくことは、人生の航路に勇氣と自信を持って立ち向かう生活姿勢を作り上げるのに役立つ。また、大人が子どもに教えたいことを教え込むことが多く、子どもの自発的な思考や表現に丁寧に寄り添い、学びを広げていく教育がなされていない現状を捉え、表現される場は自由に解放され本来の自分が出される場であることが基本であること、主体性が尊重され、感情は丁寧に扱われ、人それぞれの気づきが成長過程を支えているものとなることを、表現教育で実践されていた。

それぞれの教育は、身体を使いこなす技術の向上が目的ではなく、身体をとおした教育が調和のとれた全人格の発達のための人間教育であることを主張している。非言語での心身の繋がりに着目することは、人間関係を構築していく上での基礎となる力であり、表現を豊かに広げる活動として教科横断でのバランスのとれたカリキュラムを作成する時、子ども理解の観点となる。

ランディー・リプソン・ローレンスによる身体知の研究(2016)で、身体を通じた学びは、身体が有する知の可能性を広げ、論理的な思考からでは生まれない共感性や感情の可能性を育てることによって、個人の力を生涯にわたって育て、人間関係の力が育まれることを証明している。まさに、教育の場において人がありのまま受け入れられ、身体を通して能動的かつ主体的に学ぶことは、全人的な教育となる事を研究しているのである。



図2 玉川学園における舞踊教育の理念

本研究では玉川学園における舞踊教育が図2で示すように、全人教育の中に位置けられ、創立当初から人間教育の基礎としてカリキュラムに組み込まれていたことが明確となった。身体をとおした知が学びを促し、深めるのに有効であることが研究されてきている現在の教育界にとって、保育者や教育者が身体の捉え方を能動的なものとして理解する事で、学びの質を支える事が求められていると考えられる。今の教育界にとって身体をとおした教育を先駆的に実践し、長きにわたりカリキュラムに組み込まれている玉川学園の舞踊教育の実践の価値は大きい。今後、玉川学園における舞踊教育のカリキュラムや方法をまとめ、舞踊教育を受けている子ども達の学びと知、育ちを研究していくことは、身体と教育の研究にとって大きな示唆を与えることになると考えている。

引用文献

- ・岡田陽 (1989) 「玉川の演劇と舞踊」 玉川大学出版部
p27
- ・岡田陽 (1984) 「玉川学校劇辞典」 玉川大学出版 P18
- ・岡田陽 (1985) 「ドラマと全人教育」 玉川大学出版部
P4・17・44・46
- ・岡田純子 (1957) 「学校舞踊」 玉川大学出版部 p2・
100
- ・岡田陽 (1994) 「子どもの表現活動」 玉川大学出版部
P10-19・22・24-26 34・44-65
- ・ブライアン・ウェイ著岡田陽訳 (1978) 「ドラマによ
る表現教育」 玉川大学出版部
P3・4・10・20・40
- ・マリオン・ゴーフ著 玉川まや子訳 (1997) 「ダンス
の教え方・学び方」 玉川大学出版部 p11・20・45・
46
- ・ルドルフ・ラバン著 神沢和夫 (1985) 「身体運動の
習得」 白水社 p3・4・45・47・224-256

参考文献

- ・ランデイ・リップソン・ローレンス (2016) 「身体知」
福村出版
- ・山本敦久 (2016) 「身体と教養」 ナカニシヤ出版
- ・玉川学園 30 年史